

東京都立武蔵高等学校

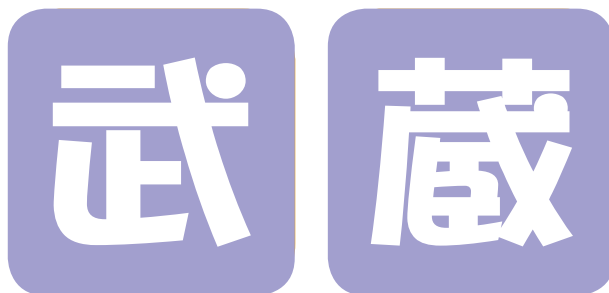
同窓会事務所

〒180-0022

武蔵野市境1-3-4

エーブル武蔵境203

Tel & Fax 0422-27-7571



55

2020. 5.20



上絵付け陶板画「青紅葉」(左)・「山吹」(中央)・「額紫陽花」(右) それぞれW26×H35cm
臼井麻美子 先生(元 東京都立武蔵高等学校・附属中学校 美術科教員)の作品

今年度の同窓会総会中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、今年度の東京都立武蔵高等学校同窓会・総会(2020年6月7日予定分)を、中止することとなりました。

※詳細は同窓会ホームページに掲載

令和1年度卒業生同窓会新幹事

A組
B組
C組
D組
E組



母校都立武蔵高等学校の創立80周年を祝う

東京都立武蔵高等学校同窓会 会長 土屋 正 忠



昭和15年(1940)、東京府立第十三高等女学校として創立された母校は、本年令和2年(2020)4月、創立80周年を迎えました。今日では中高一貫教育校として都立高校のトップクラスと評価され、後輩の現役生達が大活躍しています。

歴史を振り返りますと、創立後まもなく始まった大東亜戦争の荒波に揉まれ、生徒達は昭和飛行機(株)の工場に勤労働員されたり、校庭で畑を耕し食糧増産に携わったり、苦難の連続でした。戦後は東京都立武蔵女子新制高等学校となり再出発、さらに昭和25年男女共学となり、名称も東京都立武蔵高等学校とし、今日の学校の原型が出来ました。

昭和35年から日本は高度経済成長を迎えるとともに、昭和22～24年生まれのベビーブーマーが高校進学期を迎え、一学年9クラス450人を超えたこともあり、校内は生徒達で溢れかえっていました。

やがて時代は移り、昭和50年、60年、平成と日本全体が成熟期に入り、少子化現象が明らかになってきました。15歳人口は昭和30年代後半の年220～240万人から、今日では100万人に減少しています。これらの変化を受けて、都立高校改革が行われ平成19年(2007)4月、母校は6年制の中高一貫校として再出発し今日を迎えています。80年間に母校を卒業した卒業生は2万5000人を超え各界で大活躍していることを誇りに思います。これを機に母校がさらに発展することを期待いたします。

ところで今日の同窓会の課題は、卒業生の減少と財政問題です。かつての最高10学級480人の時代から現在5学級200人、数年後には4学級160人の時代を迎えます。これらの時代の変化に対応して、同窓会費にプラスして同窓生が経営する企業などの協賛広告制度を来年度から開始したいと思います。どうぞご理解とご協力のほど、お願い申し上げます。

結びに同窓会の目的は会員の親睦と現役への支援であります。これからも、この目的を達成するため役員一同、力を合わせて運営にあたりたいと思います。

なお、学校側から創立80周年記念事業は東京オリンピック・パラリンピックの関係もあり、来年の秋に実施したいとの申し入れがありましたので、学校の記念事業に併せて記念事業を企画したいと思います。

今年の同窓会・総会は中止といたします

令和2年(2020)6月7日(日)に開催を予定しておりました以下の事業を中止します。

◎同窓会総会における2019年度事業報告・決算報告、2020年度事業計画・予算案等審議。

◎[総会アトラクション(講演)「ハイジ・マルコ・ポケモン、そして“なつぞら”」～アニメーターの草分け小田部羊一さん(7回生)が語る仕事・人生～]。

◎懇親会に伴うホームカミングデイ(32回生・52回生)。

同窓会の皆さまへ

東京都立武蔵高等学校・附属中学校 統括校長 南 和 男



同窓会の皆さま初めまして。高橋 豊校長の後を受け、着任致しました南 和男でございます。昨年度までは、東部学校経営支援センターで担当課長を務めておりました。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本校は、府立第十三高等女学校として創設以来80年目、併設型の中高一貫校として13年目を迎えています。入学式がコロナウイルス感染症拡大予防の関係で延期となる中、4月8日には、同窓会長 土屋正忠様にご多用にもかかわらずお越しいただき、様々なお話を伺うことができました。生徒たちは、諸先輩方からの御期待に応えられるよう奮闘し、東京大8名(現役7名)、国公立医学部医学科現役9名をはじめとして、国公立大学85名(現役71名)や早慶上理現役合格95名などの高い成果を上げております。また、ほぼ全員が部活動に加入し、文化祭・

体育祭・音楽祭をはじめとする学校行事にも熱心に取り組んでいます。

これまでの「武蔵」の良き伝統を引き継ぎながら、教育活動を一層充実させ、さらなる発展のために全力を尽くしてまいります。同窓会の皆さまには、本校の教育活動に対し、今後とも御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

残念ながら開催中止ですが……

今年のアトラクション

〈講演〉「ハイジ・マルコ・ポケモン、そして“なつぞら”」

～アニメーターの草分け小田部羊一さん（7回生E組）が語る仕事・人生～



長生きすると、とんでもないことが起こったりするものです。昨年、NHKの朝ドラ100作目の記念番組「なつぞら」が放送されました。アニメーションの世界を描いたものでしたが、なんと主人公は、我がパートナーをヒントにするというものだったのです。さすが全国放送だけあって、沢山の方にご覧いただけたようです。

そんなせいもあったのか、同窓会の方から、講演会の声がかかってしまいました。長年、アニメーションの世界に生きてきましたので、ドラマを取っ掛かりに、アニメーションの話や母校武蔵でのお話などをしてみようかと思っています。よろしくお願いいたします。

1955年 東京芸術大学美術学部日本画科入学。前田青邨に師事。1959年 東映動画(株)入社、アニメーターとして出発。劇場長編映画「わんぱく王子の大蛇退治」、「長靴をはいた猫」などでアニメーション原画を担当。「空飛ぶゆうれい船」で初の作画監督。1971年 高畑 勲・宮崎 駿とともに東映動画を辞し「パンダコパンダ」「アルプスの少女ハイジ」「母をたずねて三千里」などでキャラクターデザインと作画監督を務める。1979年「龍の子太郎」1981年「ジャリン子チエ」作画監督。1985年 開発アドバイザーとして任天堂(株)に入社。「スーパーマリオブラザーズ」のデザイン監修、「ポケットモンスター」のアニメーション監修。2019年 NHK連続テレビ小説「なつぞら」アニメーション時代考証。

お元気ですか 会員・教員の消息

商社マンから難民支援へ 27回C組

国連UNHCR協会は、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR：The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees）の日本市民社会に対する公式支援窓口です。日本全国で難民問題に関する広報啓発活動と、難民支援のための資金調達活動を行っています。私は大学卒業後、三菱商事に入社しました。入社後すぐにアラビア語研修生としてエジプトのカイロに飛びました。カイロ空港に降り立った1980年9月21日前夜にエジプト近隣でイラン・イラク戦争が勃発、大変緊張感のある地域に来たという実感がありました。その後、サウジアラビア、米国（ニューヨーク）、ヨルダン、アラブ首長国連邦に駐在しました。商社マンとして最後の勤務地はドバイです。ドバイをベースにイラン、イラクやイスラエルを含む中東市場全域でのビジネスの推進に当たりました。中東の各地で築いた人脈やネットワークはいまでも役立っています。

日本は石油の90%を中東に依存しています。一方、中東では大量の難民が発生しています。日本は経済的な恩恵を受けているわけですから、そういう地域の問



題にはもっと目を向ける必要があるのではないかと、いつも現地で仕事をしながら考えていました。中東は常に紛争やテロリズムと隣り合わせ、私は現地の人々と一緒に仕事をした仲間たちに情報面で何かと助けてもらいました。無事に日本に戻ることができたのはこうした地元の友人たちのお陰です。

2016年ドバイから帰国、その翌年国連UNHCR協会事務局長職の一般公募を知り、お世話になった中東の人々や国際社会に恩返しをしたいとの思いで応募し現職に就きました。中東情勢はカイロ留学時代からフォローしてきており、2016年から中東調査会の客員研究員を務めています。武蔵高校には大学受験一辺倒でない多様な価値観を育む校風がありました。武蔵の3年間で学んだこと、感じたこと、悩んだことが、その後の大学、企業、現在の人道支援活動などの生き方につながってきているような気がしています。

31回生・51回生 ホームカミングデイ報告

昨年、2019年は31回生・51回生のホームカミングデイでした。懇親会にはそれぞれ93名、32名が参加されて旧交をあたため、同窓会総会を盛り上げてくださいました。

その後、同じ会場で31回生(153名)と51回生(60名)



の合わせて213名による合同同期会が盛大に行われました。31回生は興奮してしゃべりすぎ、集合写真の撮影を忘れたそうです。幹事さんたちからの楽しい報告は同窓会ホームページにアップしてあります。そちらもぜひご覧下さい。

お元気ですか 会員・教員の消息

好きなことに邁進できる幸せ

—海外生活19年を振り返って—

48回F組

日本を離れて今年で19年目になります。高校時代は9科目中英語が一番苦手で、英語の授業時はいつもこっそり同じクラス



で帰国子女だったSさんにノートを見せてもらってなんとかしのいでいた私が、今や4ヶ国語を話すバイリンガルならぬクアトリンガルとして仕事をするようになるとは自分でも信じられません。その原動力になったのは、自分の本当に好きなもの、音楽、で、それを育ててくれたのは武蔵の自由な校風の土壤に他なりません。

私は現在、ドイツ・ミュンヘンにある、バイエルン国立歌劇場で照明デザイン関係の仕事をしながら非営利オペラ団体、オペラポムルージュ in New Yorkを主催し、オペラ演出家として自分の作品を発表する活動をしています。伝統的なオペラの良さを常に念頭に置きつつ、音楽と演技の融合を試みる演出スタイルで、オペラと落語の融合、オペラとアニメの融合など、オペラに馴染みがない人にも親しみやすいような作品作りにも取り組んでいます。15年ほど前から体験型演出といって、実際にお客さんにも作品の一部を演じてもらい、それで公演が進んで行く、というような演出も手がけています。演出家という仕事は、それがたった1日の公演だとしても、その作品のために何年もかけてのリサーチや下準備があり、意外にも大変に地味な仕事ですが、実際に舞台稽古が始まると本当に楽しい時間が待っています。演出をしているときは本当に楽しくて、「この瞬間に死んでも全く後悔ない!」と毎回思うのです。こういう気持ちになれるものに携われて私はなんて幸せものなんだろうかと思います。

ここミュンヘンに昨年引っ越してくるまで、オペラ

演出の修行をベルリン、ウィーン、パリ、ニューヨークとかれこれ19年もしてきました。初めの頃は言語がうまく喋れなくて苦い思いをしたり、慣れない土地で体調を崩したけれどお金がなくて救急車に乗れなかったり(海外の救急車は健康保険がない場合は有料になるところが多いです)、買えるものといえば5キロで50円の半分腐ったジャガイモくらいでそれで何週間も食いつないだり、などサバイバルな生活もしてきました。大変な時には、武蔵の同級生が「緊急物資」と称して日本食を送ってくれたり、励ましの手紙を書いてくれたりして、それが本当に大きな心の支えになりました。

こんなにたくさんの人から頂いたご恩を、次の世代に返すことでご恩返しをしたい、という意味もあり、武蔵同窓会会長からのお許しを経て、都立武蔵高校同窓会海外支部を4年前に立ち上げました。昨年の私の引っ越しに伴い、海外支部アメリカ地区部長は一昨年48期生の清水が引き継ぎ、私はドイツを中心に同窓生の輪をヨーロッパにも広げるべく、今年から海外支部ヨーロッパ地区部会を発足していきたいと考えております。アメリカ、ヨーロッパに限らず世界の他の地域にお住いの同窓生名簿も作成しております。海外生活は何かと慣れないことも多いですが、そんな中、同窓生の輪はきっと何かの役に立ちましょう。海外にお住いの卒業生をご存知でしたらどうぞご連絡いただけましたら幸いです。

連絡はこちらから：<https://metromusashioverse.wixsite.com/home>



クラス会・同期会だより

昭和36年卒A組クラス会 13回A組



皆、自分は若いと思ってます

令和元年10月31日に立川の「がんこ寿司」で5年振りにクラス会を開いた。卒業して58年、皆77歳、つまり喜寿を迎えたのと、クラス会を熱望する人から「モタモタしてたら死んじゃうよ」との助言もあり、急遽、開催した。健康に不安を抱える人も居たが20人もの参加があった。在ロシアの人も運良く参加出来たし、京都から駆けつけた人もいる。皆、元気であった。

幼少期、戦後の辛い時期を経験しているだけに、何事にも立ち向かえる精神は旺盛で、表には出さないが、配偶者をしっかり支えている優しい人々も多い。この58年で遣りたいことを成し遂げた人、立派に仕事を成し遂げた人、実に良い顔をしている。

逢えば皆、一瞬にして58年前に戻る。本当に裏表の無い世界で楽しく語り合えた。

今回は3年後80歳時、つまり傘寿に合わせて開こうと考えていたが、こんなご時世、2年後に実施したい。

「喜寿クラス会」開きました 13回F組 上羽 登美子(旧姓 山崎)

昭和36年に、武蔵を卒業して、早、幾年。令和元年、そろって77歳を迎えました。

平成最後の年のお正月、「喜寿祝いをしませんか」という一通の連絡が発端で、令和元年6月18日、吉祥寺の「えん」で開催が決まり、全員に連絡。しかし、近

況報告の返信は多いものの、出席は少。

前回70歳のときの欠席理由は、孫の世話、親の介護が多かったけれど、今回は、妻が、夫が、はたまた自分が、体調悪く欠席、との返信が多く、時の流れを感じました。残念！それでも、男性4名、女性10名、軽井沢から、松本から、高崎から、と集まってくれました。

卒業以来60年、それぞれの過ぎし人生を語り合い、今は自分にぴったりの趣味と出会い、人生を楽しんでいる姿は、さすが武蔵！と思いました。



喜寿を迎えた面々

40年前にタイムスリップ ヒュッテでの33回生同期会

2019年9月28日～29日に同期生有志で大菩薩に行ってきました。参加された方が感想を寄せてくれたのでご紹介します。

●大菩薩峠からの眺望と火を囲む楽しさが忘れられずヒュッテを再訪！中高年の登山ブームでさぞや大勢…と思いきや、最初の年に集まったのは発起人の4名だけでしたが、今年はクラスの垣根を越えて初参加者4名を加え8名に！ストーブを囲んで鍋を味わった後、裏庭で焚火と花火ではしゃぎまわる姿は40年をタイムスリップ……よく食べ、よく飲み、よくしゃべりました。翌朝は、ヒュッテが長く維持されることを祈りつつ、皆でヒュッテの掃除と整理整頓に精を出し山を後にしました。

クラス会・同期会だより

●山歩きができること自体が楽しみだった一年目、あまりに不甲斐ない一年目の歩きを何とかしたいと少し努力して臨んだ二年目。三年目の今年は、自分で誘った友人もいたので、楽しんで欲しいと、ようやく人のことを少しばかり気にしました。友人に「誘ってくれてありがとう」と言われて本当に嬉しく思いました。回を重ねるごとにだんだん欲張りになる私がいいます。もっと息を切らさずに歩きたい、地図をみて時間のイメージを持って歩きたい、新たなコースやもう少し長い距離を歩きたい、景色や花や木々の様子、苔やキノコに詳しくなりたい、上手に写真を撮りたい、おいしいご飯もつくりたい、、、そうして心の中で四年目も必ず行こうと決めてしまっています。

●初秋大菩薩嶺にたたずむ大菩薩ヒュッテに行ってきました。長年にわたり、山岳部のOBの方たちが手をかけて守ってきてくださったこの山小屋にはたくさんの人々の温かい愛情を感じずにはられません。とにかく、空気も水も本当に美味しくて生き返るようでした。旧友たちと歩いた、大菩薩峠から雷岩に至る稜線の気持ちの良さ。薪ストーブを囲んで食べたお鍋の美味しかったこと。夜が更けてからは、寒さを感じる外に出て、焚き火をしながら興じた花火。冷え込んだ朝の清々しい空気の中、外で飲んだコーヒー。日常から離れ、しばし高校生に戻った本当に楽しい二日間でした。



ストーブを囲んで、しばし歓談

平成の31年間を繋ぐ集い 40回B組



増田先生(前列左から3番目)とB組参加者

元号が平成から令和に代わって間もない昨年6月29日(土)の夕刻、増田達男先生(化学)のお住まいから程近い立川にて、40回生B組の同窓会が21名で行われた。我々が卒業した昭和63年から令和元年まで、ちょうど「平成の31年間」を経て久しぶりの再会となった。

教壇に立っていた頃よりスマートになられた増田先生からは「手のかかった生徒ほどよく覚えている」、「大病を患った時の担当医が偶然教え子であった」などのエピソードが披露された一方、元教え子からのとおきの思い出話を「全く覚えてない」と一蹴する愉快的シーンもあった。同窓の顔ぶれは行政・企業勤めから医師、教授、起業、家事など多士済々。卒業以来初の顔合わせとなるメンバーもいたが、その変わった姿、変わらない姿に、大いに盛り上がった。どちらかと言えば、変わらない方が多かったようだ。同窓会の楽しい時はあっという間に過ぎ、84歳(当時)の増田先生から、また来ますとの嬉しいお言葉をいただき、近々の再会を約して中締め。先生をお見送りした後、やや強い雨の夜にもかかわらず多くが二次会の席に移って懇親を続けた。

最後に、お越しいただきました増田先生、在校当時の名簿をもとに時にオレオレ詐欺と疑われながら連絡を入れ続けてくれた幹事の〇〇さん、本当にありがとうございました。

昨日・今日— 近頃の私 …

33回A組(昭和56年卒) 樹林 伸

『好き』の半分は武蔵で教わった

決して褒められるような生徒ではありませんでした。あの時代の武蔵生の多くは、案外似たような自己評価だったのかもしれませんが、その中でも私の気儘さは、いささか度が過ぎていたと思います。髪を肩まで伸ばしギターを背負って、夏になれば短パンTシャツにサンダル履きで通学していました。それでも先生に何一つ咎められない——私の知っている『ムサコ』は、そんな不思議な『進学校』だったのです(いやいや進学校じゃなかったでしょ、と同窓生たちに突っ込まれそうですが、世間の評価ではたぶん……)。

勉強はほどほど、遊びは精一杯。体育祭や文化祭では三年生になってまでも、クラスや部活で一丸となって、『好き』なことに惜しみなく時間と労力を費やす。そんな経験を多感な高校時代にできた、いや、してしまったことが、その後の私の人生を決めたと言っても過言ではありません。

一浪して早大に進学してからの私は、当時の大学生たちから進っていた、バブルに向かっていく時代の空気に、紛れていったように思います。ほどほどに遊びつつ、高校時代に本気で熱中したはずの音楽活動の延長戦を、どこかに迷いを抱えたまま続けていました。

甘い考えで望んだ就活で惨敗を喫し、就職留年が決まったと思った時の話です。最後の面接の帰り道、これから何をしようかとぼんやり考えながら、最寄り駅の書店に吸い込まれました。ふと立ち読みを始めた私は、たまたま手に取った本の面白さに夢中になり、そのまま読み切ってしまったのです。それは『ぼくらの時代』という、今は亡きベストセラー作家栗本薫さんの江戸川乱歩賞受賞作で、バンド活動に打ち込む若者たちを描いたミステリでした。小説に描かれていた瑞々しい青春群像は、私に忘れかけていた情熱を思い出させ

てくれたのです。それは高校時代には当たり前のよう

に感じていた、『好き』なことに打ち込む楽しさでした。私はその日のうちに五百枚の原稿用紙と筆記用具を買って帰り、親に留年させてくれと頼むが早いか、乱歩賞に応募するための長編小説を書き始めました。それから一カ月半、四百枚近い原稿を書き終えるころには、賞のことなど二の次になっていて、自ら物語を紡ぎだす面白さに熱中していました。そして捲土重来を期す二度目の就活では、出版編集の仕事に就いていず

これは独立し作家を目指そうと、初めて本気で自分の将来の目標を、具体的に思い描くようになっていたのです。

その後は講談社に入社し、『シュート!』『GTO』などの作品を編集者として企画した後に独立。『金田一少年の事件簿』『神の雫』『サイコメトラー』『ブラッディ・マンデイ』などの漫画原作や『ビット・トレーダー』他の小

説作品、ドラマ『HERO』の企画、市川海老蔵と組んだ歌舞伎、ゲーム『ファイアーエムブレムif』のストーリーなどに縦横無尽に関わってきましたが、いずれも自分の中の『好き』が生み出した作品です。あの失意の中で出会った一冊の小説をきっかけに、『好き』への情熱を思い出し、仕事につなげていけたおかげで今の私があります。そして『好き』を形にしていく充実感を教えてくれたのは、やはり

武蔵の三年間だと思っています。だからこそ、中高一貫になり進学実績に力を入れてもその校風は、自由な発想を育む昔のままの武蔵であってほしい。いち卒業生として、そう願ってやみません。



高校3年時の音楽祭で。右端筆者(八王子市民会館にて)



昨日・今日— 近頃の私 …

39回F組(昭和62年卒) 高田 礼人

研究者人生の通過点s

昭和62年に都立武蔵高校を卒業し北海道大学に進学しました。両親の出身地である北海道は、子供の頃毎年夏休みに昆虫採集や魚釣りに没頭した馴染みのある土地でした。当時の北大は全員大括り入試で(理系は理Ⅰ～Ⅲ系に分かれており、入学後1年半の成績順に学部を選択できるシステム)、生物好きだった私は理Ⅲ系に入学しました。その頃から研究者志望ではあった



ものの、入学当時ではどの学部に進むか決めておらず、ただ漠然と脊椎動物以上の高等生物を研究したいと思っていただけでした。結局、動物のことを幅広い分野で学べる獣医学部を選んだのですが、高等生物どころか生物とも言えないような極小の「ウイルス」を研究することになり、現在に至っています。

北大在学時には剣道部に所属していたこともあり、決して優等生とは言えない就学っぷりでしたが(上の写真は、アフリカからの留学生と釣りに行った時のもの。まだ、武蔵高校剣道部のジャージを着ています)、当時の大らかな学風、優しい先生方、優秀で親切な同級生の皆様のおかげで無事に獣医学部を卒業し、そのまま大学院博士課程に進学しました。そこから本格的に研究者への道を目指して実験に明け暮れる日々が始まりました。振り返ってみると、当時は何をやるにも随分と時間がかかっていました。例えば、画像のデジタル化技術やEmailあるいはインターネットといった通信技術が普及していませんでしたので、読みたい論文は図書館に行って書庫の中の膨大な書物の中から探し出してコピーする必要がありましたし、研究者同士のコミュニケーションも電話あるいは手紙等の紙媒体で行っていました。現在は、こういったものにかかる時間は殆どなくなり、目が回るほどの慌ただしさで情報のやり取りができ、研究の世界もすごいスピードで進んでいます。しかし、速いからといって必ずしも良い研究が次々と生まれるとは限りませんが。

大学院卒業後、アメリカのメンフィスにある研究所



でポスドク(博士号取得後の研究員)として働き、帰国後に北大獣医学部の助手、東大医科学研究所の助手を経て、2005年に北大人獣共通感染症リサーチセンターに教授として赴任しました。このセンターは非常にユニークで、様々な分野の研究者が研究領域の垣根を越えて人獣共通感染症の制圧に向けた研究を推進しています。私の主な研究

対象はインフルエンザウイルスとエボラウイルスです。この2つのウイルスは共に野生動物由来であり、それが人に伝播し感染症を引き起こす典型的な人獣共通感染症病原体と言えます。現在問題になっている新型コロナウイルスも、動物(恐らくコウモリ)由来と考えられます。そういった野生動物が持っているウイルスを調べるために毎年アフリカに行き、コウモリを捕獲してウイルスを探しています(写真は、玉網でコウモリを捕まえたところ)。同時に、診断法や治療法の開発も行っており、私たちが開発したエボラ出血熱の迅速診断キットが、アフリカのコンゴ民主共和国で使用されています(写真は、キットを渡すところ)。

研究には創造力・想像力が必要なのですが、現在の



世の中は、情報や物に溢れていますので、それらの能力が培われにくい環境になってきていると感じます。また、創造力・想像力

は研究者だけではなく、未来を切り開いていく人達全てに必要なものだと思います。若い人たちには、安易に手に入る情報世界で満足しないで、いつでも「何故…?」という疑問を持ち、自分で色々な可能性を追求していく姿勢を大事にして欲しいと思います。…というような、説教くさい事を言うおっさんになった自分を自覚する今日この頃であります。

最後になりますが、昨年エボラウイルスの治療薬開発のための研究費を募るために、クラウドファンディングに挑戦しました。その際には、武蔵高校の卒業生の皆様にも暖かいご支援を頂き、同門の絆のようなものを感じました。この場を借りてお礼申し上げます。

(タイトル末尾の「s」は複数形のsです)

広告募集のお知らせ

◎同窓会報に広告掲載(有料)しませんか

同窓会ではこの度、同窓会を取り巻く状況の変化を踏まえ、同窓会報『武蔵』への広告掲載を募集することとしました。以下をご参照の上、ぜひご理解・ご協力をお願いします。

○広告掲載で期待できる効果

- ・同窓会活動の財政的支援
- ・卒業生の活躍状況の周知→業績アップにつながる?
- ・広告主同士で異業種交流のきっかけづくりなど

○会報は武蔵高校同窓生2万5千人中、住所不明等の方を除き、現役生や教職員を含む約1万7千人超に毎年5月に配布されます

○広告掲載は来年度発行の56号からとし、毎年、発行ごとに募集します

○対象広告は「武蔵高校卒業生が経営・代表を務める法人及び事業店舗、事務所等の広告」に限ります。

※法人＝会社、医療・福祉関係法人、NPO法人など 事業店舗＝施療、物販、飲食店など
事務所＝弁護士・会計士・社労士・建築設計・介護サービスなど

詳細は、広告掲載取り扱い要綱に定め、公正・公平に掲載していきます。

○申込は毎年度1月末日(56号は2021年1月末日締め切り)

○申込方法 「広告掲載申込書」と掲載原稿をファイル化しメールにて同窓会事務局に申し込むか、実寸大の版下を郵送にて事務局に送付してください。締め切りは毎年1月末日とします。当面はモノクロでの掲載です。

なお、申込みが多数あり、編集上掲載できない場合には次号から順次掲載します。

○広告のイメージ

有限会社 松 本 商 事

印刷プランナー

印刷・製本のことならご相談ください

取締役社長 武蔵野 太郎 (13回生)

本社 武蔵野市境 1-3-4 エーブル武蔵境 203
☎ & fax 0422-27-7571

有限会社 松 本 商 事

印刷プランナー

取締役社長 武蔵野 太郎 (13回生)

本社 武蔵野市境 1-3-4
☎ ○ ○

酒と肴の店
うまいものや 武蔵

武蔵野 桜子
(42回生)

☎ & FAX 0422-27-7571

アクセス

〈掲載料・その他お問合わせ・事務局まで〉

〒180-0022

武蔵野市境1-3-4エーブル武蔵境203

Tel&fax 0422-27-7571

e-mail

◎ なお、ホームページへのバナー広告も募集しております。同窓会ホームページをご覧ください

URL <http://musashi-dosokai.com/>

昨年のワールドカップ日本大会と日本代表チームの活躍について

日本ラグビーフットボール協会理事 浜本 剛志 (27回F組)

(4年前の同窓会総会で講演してくださった浜本剛志さんに、2019年ワールドカップにおけるラグビー日本代表チームの大躍進について、講評していただきました。)

昨年11月2日、日本中を熱狂の渦に巻き込んだ第9回ラグビーワールドカップ日本大会が南アフリカの優勝をもって44日間の祭典の幕を閉じました。

今回の大会の観客動員数は170万4千人、訪日観戦外国人40万人、決勝の横浜スタジアムでの観客数は7万人を超えテレビの最高瞬間視聴率は日本対スコットランド戦で53.7%にも達しまさにラグビーを愛する者にとっては夢のような日々でした。国際統括団体、ワールドラグビーのビル・ボームント会長も「最も偉大なW杯として記憶に残る。日本は開催国として最高だった。」とその成功を評価しました。

そして何よりも開催国の日本代表が世界の強豪国であるアイルランド、スコットランドを破り4戦全勝で予選プールを勝ち抜き決勝トーナメントに進んだことが日本人の心を鷲掴みにした最大の要因であったことは言うまでもありません。実は日本代表チームがここまで快進撃を続けた伏線は前回2015年の第8回イングランド大会にあったと

私は推測しています。それまでの日本代表チームのワールドカップにおける戦績は1勝2分け21敗と惨憺たるもので、世界には全く歯が立たず長期低迷が続いていました。この状況を何としても打開しようと起死回生の一手でヘッドコーチに起用したのが現イングランドヘッドコーチのエディー・ジョーンズ氏でした。彼は今までにない「ジャパンウエイ」という他の強豪国と差別化した日本独自のユニークな戦法を徹底して、予選敗退となったものの南アフリカをはじめサモア・アメリカに勝利し世界のトップチームとも十分に渡り合える感触を得たことがまさに日本ラグビーの大きな転換点になったのだと確信しています。

そして第8回大会終了後、いよいよ次の第9回ワールドカップが日本で開催されるにあたってヘッドコーチとして白羽の矢が立ったのが今回のジェイミー・ジ

ョセフです。

彼は先ず世界で強豪に勝つにはチームの選手とコーチの間でしっかりとコミュニケーションをして意思統一を図り連携することが大切だと考え前任のエディーが上意下達タイプのやり方だったのに対し選手の自主性を重んじました。ミーティングでも選手の意見をよく聞き、ゲームプランも柔軟に変えてゆく面もあ

ったと聞いています。また戦術面でもこれまでと違い必要に応じキックも使い、オフロードパスも積極的に取り入れてゆくことを奨励し練習を

重ねました。

加えて特筆すべきはスクラムを徹底的に強化し、ラインアウトの獲得率向上にも重点を置き、アイルランド、スコットランドという強豪に対し充分通用する完成度にな

まで達したことです。そのようなチーム内意思疎通の向上と、プレーの進化の結果として「ワンチーム」になることが出来、前回のワールドカップ時のチームと比べ一段レベルの高いところに到達したのだと思います。

このワールドカップを転機として日本のラグビー環境は明らかに変わりました。ラグビー選手もマスコミに登場することが多くなり注目度が上がり嬉しい限りです。私たちラグビー協会関係者はこのラグビー人気を一過性のものとせず、これをチャンスにより多くの皆様に見て楽しんでもらえると同時に競技人口を増やしてゆくことが日本ラグビーにとって今後一番の課題だと強く認識しています。

昨年のラグビーワールドカップ日本大会の日本代表チームの活躍と大会の成功が終着点ではなく「ラグビー競技を誰からも愛され、親しまれ、楽しめる人気の高いスポーツにする。」という日本ラグビーの目標に向けての大きな通過点と捉えて今後様々な改革をしてゆきます。

まだラグビーを生で観戦したことのない皆さま、どうか一度ラグビー場に足をお運びください。そしてぜひ「にわかラグビーファン」になってください。



表紙によせて

作者紹介 臼井 麻美子 先生(元 東京都立武蔵高等学校・附属中学校 美術科教員)



平成12年からの14年間、美術科と美術部の顧問を担当しました。その間に56期生と59期生の担任をさせていただきました。武蔵での教員生活は、真面目で心優しい生徒たちに囲まれ充実したものでした。美術大学進学者も多く、各方面で活躍する卒業生のお話を聞く度に彼らの作品の発表の場と交流の場があったらいいなという思いがつのり、武蔵高校同窓美術展という構想が生まれました。卒業生数人への呼びかけから始まったことが、同窓会のご協力を得て沢山の同窓生のご賛同をいただき、平成30年3月に第1回、平成31年3月に第2回同窓美術展が実現しました。現役生の美術部員の作品が多数出品されたことも嬉しいことでした。ご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。第3回武蔵高

校同窓美術展は令和3年3月を予定しています。多くの皆さまのご参加とご来場により盛会となりますことを願っております。

表紙の作品は白磁の陶板に上絵付けの技法で描き、800℃で焼成したものです。専用の絵具で描いては焼成することを繰り返して色の深みを出していきます。透明感と立体感を表現できることに魅力を感じ、野の花をテーマに制作を続けています。

略歴

2000年～2014年 都立武蔵高等学校・附属中学校美術科教諭

2014年～2019年 都立三鷹中等教育学校美術科非常勤教員

令和2年度 武蔵高等学校・附属中学校 異動者名簿

転 入

転 出

卒業生総数 26,024名 住所不明・物故者 10,031名